

地域支援だより

平成27年8月28日

第55号

秋田県立秋田きらり支援学校
地域支援部

きらりNet

読み聞かせや本の紹介を通して、様々な世界を体験してもらうための二つの取組を紹介します。

その1 お話キャラバン



歌や、子どもたちとのやり取りを交えた
パネルシアター「くいしんぼうのおばけ」

図書部員による読み聞かせ「お話キャラバン」は今年で5年目です。今回は二つの演目を上演しました。

パネルシアター「くいしんぼうのおばけ」は、歌の途中でクイズが出てきます。「むいてもむいてもでてこない なんだらうね♪」という質問に、児童生徒から「にんにく」「バナナ」という元気な答えが返ってきました。

ブックトークでは冒険家と助手に扮した職員が「夏だ！冒険に出かけよう」をテーマにした物語や、学研のひみつシリーズ、料理本等の本を紹介しました。参加者はちょっと頼りない冒険家と助手のやり取りを聞いたり、美しい写真を見たりと楽しい時間を過ごしました。

これまで「お話キャラバン」で使用した教材は、校内でいつでも使用できるように、一覧表にして紹介しています。「いいからいいから」の自作パネルシアター、「海から上がったお地蔵さん」のおむすびとお地蔵さんの人形など、物語の世界をより身近に感じられるようにしています。



*「海から上がったお地蔵さん」で使用した
おむすびとお地蔵さんの人形

その2 移動書架の活用

「図書室まで遠い」「移動に時間がかかる」といった理由で、児童生徒が図書室に直接訪問することが難しいことがあります。そこで本校では、カラーボックスを2段重ねて作った移動書架を小・中・高等部の教室近くに設け、本が手に取りやすいように工夫しています。

7・8月の小学部の棚は「夏だ冒険にでかけよう」をテーマに、棚ごとに宇宙、海等に関連した本を置いてみました。虫取り網を付け、色鮮やかな見出しは目を引きました。

また、県立図書館からの団体貸し出しを利用し、戦後70年に関連する図書を中学部教室前に展示しました。

各学部、児童生徒の発達段階に応じ、手に取った時の顔を思い浮かべながら選書しています。



きらり☆地区別研修会

県内の特別支援学級（肢体不自由）担任と特別支援学校の教員を対象に、県南（横手）、県央（本校）、県北（大館）で研修会を開催しました。講演は、医療療育センターの理学療法士 近藤堅仁先生が「姿勢と動作、関わりのあれこれ」という演題で、肢体不自由児についての医療面の説明と、活動姿勢（話す、作業をする等）についてのお話をいただきました。情報交換会では、日頃の実践や悩んでいることなどの意見交換が活発に行われました。今回の研修で、各地区の肢体不自由教育に携わる皆様のつながりを強めていただけたら幸いです。今後もこのような研修の機会を作る予定ですので、ぜひご参加ください。

講演より「二重課題干渉」

2種類の認知的な活動を同時にしようとすると一方のみできたり、両方ともできなかつたりすることがある。

→作業するとき姿勢はベルト等でサポートするなど、課題、負荷の適正量を調整することが大切。



参加者アンケートより

「手の動かしやすさ、声の出しやすさと姿勢との関係が分かりました」

「他校の実情を聞いて、同じことで悩んでいることが分かりました」

「休み明け、学校職員に伝えたいと思います」

「ネットワーク構築の一步になった気がします」

教育専門監のコーナー 豊かな人間関係の形成～つながりづくり活動の展開

1 他者との二項関係（誕生から4か月頃）

他者の働きかけに対して積極的に反応するようになる。他者の目を見つめ、手足を動かし、微笑みかけ、「アー、クー」等の声を出す。他者からの声かけに、表情や発声で応答する。他者とのやりとりらしいものを成立するようになる。

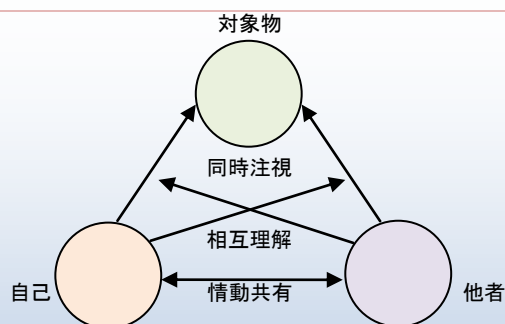
2 対象物との二項関係（3か月頃から5、6か月頃）

動くものに顔を向ける、視線を向ける。玩具を見つめる、ボールを目で追う、玩具に手を伸ばす、コップに玉を入れる。外界の物に注意を向け、物を操作することを通して、対象物の世界を理解し始める。「自己-他者」「自己-対象物」という二つの二項関係はまだ統合されていない。

3 他者と対象物との初期の三項関係（6か月頃から14か月頃）

先の2種類の二項関係が統合され始める。玩具に向けていた注意を他者に切り替える。他者に向けて声を出して、こちらを向いたら玩具を差し出す。他者の注意に気づき行動する。模倣や手渡しをする。要求に応じる行動や他者の注意を操作する行動が生起するものの、他者の意図や感情への気づきが完全でない。

4 共同注意が成立した三項関係の形成（14か月頃から18か月頃）



「お母さんはどこ」などの質問に、台所を指さして答える。ことばでのやりとりが増加し、意味するもの、意味されるものの関係を理解する。他者の意図や感情の理解が形成され、同情やいたわりなど、なぐさめる行動が生じる。

「共同注意が成立した三項関係の形成までの発達段階」 徳永(2013)

(肢体不自由教育212号「他者との出会いにより促される人間関係の構築—対人行動の発達の視点から—」より抜粋)

福岡大学人文学部の徳永豊教授は、たとえば「大人が指さしたおもちゃに、子どもが視線を向けて、『おもちゃがあそこにあるよ』というような、他者と関心を共有する事物や話題へ、注意を向けるように行動を調整する力である共同注意に注目して、つながりづくり活動を展開していくことを提案しています。日々の「朝の会」の活動をつながりづくりの視点から、子供と教師の活動、物を介した子供と教師の活動、さらに子供と教師の間に他の子供や教師が関わる仲間作りの活動に整理することでより質の高い「朝の会」となることを指摘しています。朝の係活動を「やりとり」や「つながり」という視点で見直すことで、新たな工夫が生まれるかもしれませんね。

秋田きらり支援学校に相談・見学の希望がありましたら、下記まで御連絡ください。

教頭 石川 純子 地域支援部 佐藤 忠浩

住所：〒010-1407 秋田市上北手百崎字諏訪ノ沢 3 番 127

E-mail：kirarisien@akita-pref.ed.jp

電話：018 (889) 8573 FAX：018 (889) 8575

「きらり Net」は本校ホームページから閲覧することができます。

<http://www.kagayaki.akita-pref.ed.jp/kirari/index.html>

